



TITLE:

はじめに

AUTHOR(S):

高谷, 好一

CITATION:

高谷, 好一. はじめに. 重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ : 総合的地域研究の手法確立 : 世界と地域の共存のパラダイムを求めて 1994, 4: 1-3

ISSUE DATE:

1994-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/187446>

RIGHT:

は　じ　め　に

ここに報告するものはA02（地域性の形成論理）、A03（地域発展の固有論理）、B03（総合的地域研究の概念）の3班が「東南アジアと南アジア——地域間研究の視点から——」と題して、1994年5月28日と同年7月2日～3日に行った2回の合同研究会の速記録の抄録である。

地域研究のねらいの一つは、その地域の最も大きな特徴をえぐり出すことである。他の地域と比べて、この地域はこんなはっきりとした特徴があります、ということを示すことである。象の特徴を言い表わそうとするなら、鼻が長い、と言えば良い。鶏なら刻を告げると言えば良い。そういう、いわば独自の性格を掘み出すことが、とりあえずは必要なのだろう。

地域研究なるものを何年か続けて来て、ずっと感じ続けている不安の一つは、ひょっとしたら、自分達は無駄な努力をしすぎているのではなかろうか、ということである。周りを知らないから、ポイントを外して頑張っているのではないか、ということである。象は長い鼻を持っているというためには、象以外の動物は象ほど長い鼻を持っていない、ということを知らなければならない。鶏が刻を告げるという点で、特徴的であるというためには、鶏の外の動物は刻を告げないということを知らねばならない。周りを知ることが必要になるのである。そのかわり周りをチェックしたら、ひょっとすると、一気に今までの対象の特徴が浮かび上がってくるかも知れない。地域間研究へ乗り出してみようという考えは、こういう所から出発している。

もっとも、地域間研究はもう現実には数年前から始まっていて当然な状況になっていた。ある研究会の席で坪内良博氏が、東南アジアは小人口世界ということで、特徴づけられると発表した。私達、東南アジア研究者は小人口こそ東南アジアを特徴づける大きな要素だと考えていたし、今もそう考えている。ところが、コメントに立った松原正毅氏は、小人口だけでは意味がない、遊牧地帯はもっと徹底した小人口の世界だと指摘した。あの時、すでに私達は地域間研究の入口に立っていたのである。どういう所に小人口は発生するのだろうか。小人口というのは、どういう性格を地域に与えるのだろうか。小人口というテーマを基にし、両者が議論を進めることによって、地域の理解は深まり得たのである。

こういうことがあって地域間研究というものをこの数年ずっと気にしていたのだが、今回いよいよそれを試してみようということになった次第である。

具体的にいうと、應地利明さんが、「東南アジアと南アジアを比較してみたらどうか」と口火を切って、この研究会は始まった。研究会の内容を詰める段階で、細かい点での比較はやらないようにし、大きな差異に焦点を当てようということになった。その時、私達がイメージしていたのはこういうことであった。東南アジアというのは、森と海の世界で、そこに小人口がいわば漂っている。一方、南アジアは巨大な農村空間でカースト制度に縛られた人達がじっと

している。こんなことを何となくイメージしていたのだが、そのところを詰めてみようということだった。そうすれば、東南アジアの特徴は今よりは、はっきりするのではないかということであった。

重点領域研究のメンバーにも何人かの南アジア専門家がいますが、もう少し多くの専門家に加わっていただきたいということで、應地さんのつてを頼って、インド専門家の参加を依頼した。辛島昇先生以下、専門家の参加をいただけたことは大変幸運であった。ご参加いただいた方々には、この紙面を借りて深くお礼を申し上げたい。

お集まりいただいたインドの専門家の大部分は歴史学者であった。南アジアの研究者の中には、地域研究をやる人はほとんどいないのである。このことが私達にはすでに極めて興味のあることであった。それぞれの地域は特有の秋波を発していて、ある特有の学者グループを引きつけているらしい。私達は、これ自体がすでに研究の対象になる、などと思った。ちなみにいうと、第1回目が終わったところで、辛島先生からクレームが出された。東南アジア側には歴史家がいらない。これでは話にならない。それで、第2回目には、石井米雄先生にお願いして、特別に参加していただいた。同先生にも深くお礼を申し上げたい。

ともあれ、こうして、いわばお見合いが始まったのである。お互いに初めての組合せだったので、研究会としては、それなりのお膳立てをした。東南アジア側から二人が代表で出て、二つの角度から冒頭発言をした。

一つは、私達が地域研究をどういうものと考えているのか、ということの説明である。できれば、インドの歴史家も、こうした私達のねらいを理解していただいて、そういう視点で、議論に参加していただきたいというお願いであった。これは立本成文さんが行った。

第二は、東南アジア側からすると、インドはどう見えるかという発言であった。これは、専門家を前にして素人が発言するのだから、極めて僭越なことであり、同時に恥さらしそのものであった。しかし、話の糸口を作るということで、高谷が行った。この二つを皮切りに、議論へ入っていった訳である。司会は應地利明さんが行った。第2回目は、インド側から山崎元一先生に南アジアにおけるアーリヤ化という問題について、まずお話を伺い、古代のアーリヤ化、ヒンドゥー化およびヒンドゥーとイスラーム、王権とクシャトリヤなどについて議論した。そして次に、カースト制度の入らなかった東南アジアのインド化について、石井米雄先生に問題提起をお願いした。

ここに収録しているのは、こうして行った2回、のべ3日間の議論のあらましである。この研究会が成功であったかどうかは、まだ判らない。通読していただいて、批判をいただきたいところである。ただ私共としては、必ずしも無意味なものであったとは思っていない。私達は、森と海の上にてきた「わかる論理」の世界東南アジアと、カースト制度に縛られた「くくる論理」のインド世界がやっぱりあるのではないかということを今までよりも、はっきりと確認し

たからである。こんな議論ができたこと自体が一つの前進であったと信じている。

森と海、それに対置して、カースト制を置いてみようというやり方は、おそらく既存のディシプリンではできないに違いない。生態学も歴史学も人類学も、既存の守備範囲だけを守っていたのでは、こういう議論はできないに違いない。しかし、地域の理解には、どうやらこういう偏見のない無手勝流が必要なようなのである。それに無手勝流であるだけに、ギルドの会員でなくても、誰でもが参加できる。そこのところに可能性があり、また面白味もあるのである。

2回の研究会を終えて、何人かの参加者からはもう一度やろうという声も出ている。インドの人達との見合いは、少なくとも何人かが楽しんだ分だけ、成功であったと私は思っている。他の地域に広げてはどうかという意見もある。ひょっとしたら、地域間研究から総合的地域研究へつなげられるのかも知れない。

1994年 9 月30日

「地域間研究」合同研究会

世話人代表 高 谷 好 一